



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

「神主さんと伊勢神宮へ行こう」報告	11
庁務日誌抄	10
集計分析について	6
第一回「未来の神だな」デザインコンテスト	5
神道政治連盟埼玉県本部「時局対策研修会」	5
第三十三回埼玉県神社関係者大会報告	4
埼玉県神社総代会設立六十周年記念	2
平成二十四年度神社庁々務方針	2
埼玉県内の神社参拝と御朱印めぐり	2

目次



第201号
 発行 埼玉県神社庁
 さいたま市大宮区高鼻町1-407
 電話048(643)3542
 編集 庁報室
 印刷 株式会社アサヒコミュニケーションズ



第三十三回 埼玉県神社関係者大会



埼玉県内の神社参拝と御朱印めぐり

三須 亜希子

鹿島神宮のある茨城県鹿嶋市で育ち、子供の頃から御近所の神社境内へ家族で散歩することが多かったこともあり、神社めぐりが趣味のひとつになったことはとても自然な流れでした。

とはいえ、私が御朱印を頂くようになったのは、六年ほど前からなので、とても最近のことです。旅行の際には寺社に立ち寄り、また仕事柄、口ケなどで日本各地へ出かける機会も多く、その際も時間を見つけては、その土地の神社へ足を運んでいました。その際に常に思っていたことが、「何か自分らしく、参拝の記念を残すことができないのか?」ということでした。

そのような中で、御朱印を頂いている参拝者の姿と出会いました。それをきっかけに、各地へ足を運んだ思い出を形にしたいと思いい、頂くようになったことが、私の御朱印めぐりのスタートとなりました。

はじめた当時は、御朱印を頂く方の姿はそれほど多くなかったのですが、昨年、一昨年から若い女性の姿が増え、場所によっては、列を作って待つ姿も見られ、御朱印についての関心の高まりを感じるようになった中、昨年の夏、出版社さんから私の趣味の御朱印めぐりをいかした「若者向けの御朱印本」の提案があり、今年の一月に「かわいい御朱印めぐり」という本を書かせて頂きました。

この本の出版の際には、公共の交通機関を使い、自身の足で日本各地を歩いて廻ったのですが、二〇〇一年から二〇〇六年まで、NHKさいたま放送局の契約キャスターとして、埼玉県内ほとんどの市町村にお邪魔した経緯もあり、埼玉県内の神社へ数多く足を運ばせて頂きました。

取材を経て、本に掲載することになったものは、読者層を意識して、全国的に知られている場所が目立つ形にはなってしまうかもしれませんが、それぞれの地域によって、神社の異なる雰囲気や、その地域の特性・工夫などを知ることができたことは、非常に興味深いことでした。

あくまで私の個人的な感想ですが、他の都道府県と比較して、埼玉県内の神社に抱いた印象は、「親しみやすい工夫をされている神社が多い」ということです。

たとえば、近年の「婚活」ブームもあり、縁結びの神社はとくに若い女性の話題になりやすく、雑誌やテレビなどで取り上げられることが多々あります。この本の取材にあたり、日本各地の縁結びの神社へも足を運ばせて頂きましたが、埼玉県内では、縁結びで知られている川越市の「川越氷川神社」で、参拝者の縁結びに対する真剣な思いと優しく向き合う空間のあることが印象に残りました。

そのひとつに、絵馬を奉納する参道があります。全国から縁結びの祈願で参拝者が訪れるため、ものすごい数の絵馬が結ばれていて、参道が絵馬のトンネルのようになっていました。驚いたのは、そのトンネルの形だけでなく、絵馬を眺めていた参拝者の二人組の女性の姿でした。その女性たちに何うと、一年ほど前に川越氷川神社を訪れ、絵馬を奉納したそうなのですが、願いが叶い、お礼参りにきて、一年前に結んだその絵馬を二人仲良く探していたのです。

こちらの神社は、参道に奉納された絵馬は、自然と落ちるまで神社側では触らないのだそうで、それを知っている参拝者が、川越氷川神社ならではの、参拝の楽しみ方を見つけて、一年前の思い出と合わせてその時間を楽しませてくれる姿が、とても新鮮に感じました。溢れんばかりの笑顔は見ているこちらまで、嬉しくなるほどでした。

また、御朱印めぐりという意味で、「また来たいな」と思わせて下さったのは、日高市にある「高麗神社」でした。御朱印をお願いすると、必ずその月の花の印を押してください。私がでかけた七月は、「むくげ」の印。さりげなく、この月限定のものをいただく、「来月の花は?」「自分の誕生日は何の花はなんだろう?」といった「また御朱印を頂きたい!」という気持ちが高まるのです。

実際に私の後で頂いていた方は、以前いただいて花の印を知り、わざわざ以前の訪れた月とは別の月に参拝に来られたそうでした。御朱印には必ず日付が入りますので、次の参拝の際に頂くものがまったく同じものにはならないわけですが、さりげなく季節感を楽しめる御朱印は、全国的にも珍しく、まさに、

参道が絵馬のトンネルのようになっていました。驚いたのは、そのトンネルの形だけでなく、絵馬を眺めていた参拝者の二人組の女性の姿でした。その女性たちに何うと、一年ほど前に川越氷川神社を訪れ、絵馬を奉納したそうなのですが、願いが叶い、お礼参りにきて、一年前に結んだその絵馬を二人仲良く探していたのです。



花を添えられたようで、頂いた瞬間、思わず微笑んでしまう嬉しさでした。

また、最近では御朱印めぐりの人気もあり、御朱印自体だけではなく、オリジナルの御朱印帳を作られている神社が全国的に増えている傾向があります。

以前の職場だった、NHKさいたま放送局から比較的近くにある、さいたま市浦和区の「調神社」には、神使とされる兎の刺繍が施されているオリジナルの御朱印帳があります。

私の周りの女性からもかわいいと評判で、都内からも足を運んで手にいれる女性が多く

いらっしやいます。さらに、御朱印の中にも兎の印が押されており、御朱印や御朱印帳からも、その神社にまつわる歴史などに触れるきっかけを持つことができると感じています。

私自身、もともと神社めぐりが好きで、頂いた葉などを読み、その神社について知ろうとする姿勢は持っていたわけですが、御朱印を頂くようになってから、さらにその姿勢が高まったように感じています。御朱印を頂き、押されている印などについてわからないことを神職の方に質問させていただきまして、葉に書かれていること以上のお話を聞かせて頂けることが多く、その神社について御朱印をきっかけに学ばせて頂いているのが現状です。

また、オリジナルの御朱印帳ではなくても、素敵な色合いの御朱印帳を揃えている神社も増えていきます。さいたま市岩槻区にある「久伊豆神社」で頂きました黄色地の御朱印帳は、「どちらののですか？」と聞かれることが多くあり、参拝者どうしのさりげない交流が生まれるきっかけにもなっています。

マラソン女子や山ガールなどの最近の流行を見ても、一昔前には敬遠していたことを、色鮮やかにして、お洒落に取り組む姿が見受けられるようになったことと同じく、若い世代の方が御朱印を頂くようになった要因のひとつに御朱印帳のバリエーションが増えてきたことがあるような気がします。

私はその神社を訪れた記念、その旅の記念に御朱印を頂いているわけですが、頂くようになってから、御朱印の中にその旅の思い出が詰まっていると感じることがよくあります。デジタルカメラが普及するようになり、枚

数を気にせず写真を撮ることが増えていますが、実際のその写真を見返す機会は、枚数が多ければ多いほど、あまりない気がしています。その一方で、御朱印は、その頁を開いただけで、自分が目に焼き付けたその旅の記憶が、一気に蘇ります。思い出の光景を写真などで具体的に見なくても、自身の中に深く刻まれていることを実感させられています。

また、持ち歩くたびに、その旅の思い出と共に過ごしている感覚にもなり、一層充実した時間のように感じられます。さらに、パソコンやEメールといった環境がますます増え、手書きの文字に触れる機会が減少する中、墨の香りある筆使いを、世代が下がるほど新鮮なものに感じられるようにも思います。

現代は、あらゆることが便利になり、多くのものが溢れる時代だからこそ、御朱印を新鮮に感じる方が増え、新しい思い出の形になっているのではないのでしょうか。

私個人としては、生涯の趣味のひとつとして御朱印めぐりを続ける所存です。今後も第二の故郷と思っております埼玉県内の神社へお伺いすることがあると思いますが、その節はどうぞよろしくお願いいたします。

三須亜希子(みすあきこ)

昭和五十年茨城県出身。NHKさいたま放送局を経てフリーアナウンサーに。現在はTBSチャンネル・スカパー「Jリーグ中継」リポーター、テレビ朝日「モーニングバード・サンスターCM」MCなどを担当。本年一月山と深谷社より「かわい御朱印めぐり」を出版。

平成二十四年度神社庁々務方針

神社庁参事 前原利雄

去る三月十九日、定例の埼玉県神社庁協議員会を開催、平成二十四年度の予算が承認可決され新年度がスタートした。ここに前の協議員会の報告を兼ねて今年度の庁務方針について概要を報告する。

先ず、協議員会での新年度予算大綱については、歳入では前年度よりの繰越金をはじめ、神職負担金及び二十三年度神宮大麻頒布に伴う神社本庁第二交付金それぞれに若干増を見込み、総額で一億八千九百七十九千円とする、前年比百八十二万五千円の増額予算となった。

歳出では、庁費(事務関係費)・会議費・積立金につき、前年度実績を勘案して見直しを行った。庁費(事務関係費)は、従来通り不要不急の物を省き無駄の削減に努めることとし、諸給与は、事務局の体制強化を図るため四月より二名の職員を新規採用したことにより四百六十五万円の増額とした。会議費は、前年度実績により百万円を減額した。

諸積立金は、遷宮準備金を百万円減額する代わりに災害見舞基金繰入金を増額した。これは、今回の式年遷宮募財活動も概ね完遂したことから、今後は次の六十三回式年遷宮準備

資金に切替え積立てる。災害見舞基金は、昨年東日本大震災をはじめ度重なる自然災害による罹災を教訓に、今後の備えとして蓄えるものである。

また、教化関係費は前年同額計上であるが、この科目は主に本県教化活動の中核を担う教化委員会の活動諸費であり、本県内での活動の他、一都七県神社庁が協力する様々な活動を展開するための予算も見込んでいく。とくに今年度は今期最終年度に当たり、各部会それぞれに仕上げの年として取組んでいる。さらに総代会設立六十周年記念事業の予算を見込み、他の教化関連諸費など必要不可欠な項目についても前年同額を確保する予算編成とした。

尚、予決算書(収支計算書)については、例年九月に開催の神職総会の折、業務報告とともに報告の予定にてご承知おき願いたい。

平成二十四年度は、今期役員の下で実施される最終年度となることから、通常業務の適切な運営及び継続する事業の充実とその積極的な推進に努めるほか、施策の評価と総括の年と捉え、中山庁長以下役員のご判断とご意向のもと円滑に実施されるよう、各支部を

はじめ関係諸団体とも緊密なる連携を図り鋭意取り組んで参りたい。

とくに斯界をはじめ本県神社界が抱えている喫緊の問題・事案に対し、迅速に対応するとともに実効性のある方途を講じて参りたい。

なかでも神宮式年遷宮に関しては、明年の御遷宮の御盛儀に向け神宮・神社との新たな神縁を結んで頂くべく、啓蒙・広報活動に努める。神宮大麻の増頒布運動の展開についても本宗奉賛委員会を中心に、各支部に対する提言や教化委員会をはじめ協力団体との連携強化を図って参りたい。

教化活動については、各支部をはじめ教化委員会や研修所講師会、さらには一都七県教化担当者会などにも全面的な協力を得て、各種研修会・お宮と親子の集いの開催、第二回「未来の神棚」デザインコンテストの実施、神話カレンダー・教化冊子などの作成等々さらなる内容の充実に向けて参りたい。

その他、次代を担う後継神職の育成や階位取得のための神務実習の充実を図るとともに、新任宮司や神職としての自覚を促し、教養を深め、品性を陶冶して、社会の師表たりえる人材養成のための生涯研修の実施についても、講師と協議の上計画を進めて参りたい。今年度も、各位の尚一層のご理解とご協力をお願い申し上げる次第である。

埼玉県神社総代会設立六十周年記念 第三十三回埼玉県神社関係者大会報告

仲 富 祥 則

六月十四日、第三十三回埼玉県神社関係者大会が、比企支部当番のもと、東松山市の「東松山市民文化センター」を会場に開催され、県下より約一千名の神職・総代が参加し、盛會裡に執り行われました。なお、本大会は、埼玉県神社氏子総代連合会の設立六十周年を記念しての開催となりました。

開會に先立ち、去る六月六日に薨去遊ばされました、三笠宮寛仁親王殿下の斂葬の儀当日にあり、哀悼の意を表し、黙禱を捧げました。

大会は、澤田昌生比企支部長の開會の辞に始まり、神宮並びに皇居の遙拝、国歌の斉唱、敬神生活の綱領唱和など開式儀礼の後、中山高嶺庁長による式辞があり、引き続き、井上久埼玉県神社総代会長より挨拶がありました。

来賓からは、神社本庁統理代理寺井種伯常務理事、神宮大宮司代理小川司参事、長曾我部延昭神道政治連盟会長、森田光一東松山市長、松本恒夫埼玉県議会議員らがそれぞれ祝辞を述べられました。

次に、神社庁規程表彰及び神社総代会恒例表彰、並びに埼玉県

神社総代会設立六十周年記念表彰が行われ、神職、総代、その他二百二十六名が表彰の榮に浴されました。引き続き、受賞者を代表し、箭弓稲荷神社の江野祐一郎責任役員が、この度の表彰を糧に、今後とも神社の護持運営に対し、心新たに更なる任務の精勵を誓うと謝辞が述べられました。

次に、比企支部の澤田聡光高坂神社宮司により、大会宣言(案)が朗読され、満場の賛同を得て、原案のとおり決議されました。

小休止を挟み、ノンフィクション作家・評論家・日本近現代史研究家である、保阪正康講師による「皇室典範の歴史」と題しての記念講演が行われました。

次に、次年度当番支部である秩父支部菌田稔支部長が挨拶をされ、引き続き、竹本佳徳神社庁副庁長の先導により聖寿万歳が三唱されました。最後に、埼玉県神社氏子総代連合会橋本昭司副会長が閉會の辞を述べ、大会の幕を降ろしました。

(比企支部事務局)

神道政治連盟埼玉県本部 「時局対策研修会」

中山 真 樹

五月二十一日に、神道政治連盟埼玉県本部「時局対策研修会」が、武蔵一宮氷川神社呉竹荘を会場に県内各支部神職・総代百十一名の参加で開催された。

大野光政綱紀委員長の開會の辞で始まり、神宮遙拝、国歌斉唱、神政連綱領唱和を行い、押田豊本部長より挨拶を頂いた後、来賓としてお越しいただいた庁長代理の竹本佳徳副庁長、自民党県連会長である新藤義孝衆議院議員、柴山昌彦衆議院議員、古川俊治参議院議員の四名から挨拶を頂戴した。

次に研修会として、時局講演「女性宮家創設問題について」を、ありむら治子参議院議員、また神政連政策委員である百地章日本大学教授の二人の講師の方にご講演いただいた。



ありむら先生は、女性宮家を容認すると考える一般の人々は七八割いて、神社界のような否定派は少数派に属すると言いながらも、女性宮家の創設については慎重な議論をしていかなければならないと説いた。

百地先生は、四月に行われた皇室典範ヒアリングに出席した時の話しを交えながら、戦後皇室を離れた旧宮家には、未成年の男系男子孫がいるので、そのような方々が皇族身分を取得し、将来的に宮家を創設する事が最善の方法ではないかと話された。

最後に、質疑応答があり、南條喜三郎監査委員長の閉會の辞で全日程を終了した。

(青年隊長)



第二回「未来の神だな」デザインコンテスト集計分析について

教化事業部・未来の神だな製作・頒布及び第二回神だなコンテスト実施班

第一回「未来の神だな」デザインコンテストは、現代の住宅にも似合う新しいお宮の形を一般の方々に広く募集しようとして平成二十年に実施されたもので、全国より二百八十一名の応募を頂いた。これらのデザインは、応募者それぞれが思い描く、いわゆる「理想の神だな」であり、これを集計し、年齢別・住居形態等の違いによって、どんな神棚を求めているかを分析した。この集計結果が神棚奉斎を勧める上で、指針の一つとなれば幸いである。

四十代16.7%、五十歳以上21.8%であった。応募者の住まいの形態は、一軒家59.0%・集合住宅40%であった。

三、作品形状について

「どちらでも可能」については、「置き型」「壁掛け型」「どちらでも可能」の三つに分類した。全体では、「置き型」60.2%、「壁掛け型」25.9%、「どちらでも可能」13.9%であった。

「置き型」については、男性56.8%、女性64.3%と、女性が7.5ポイントほど高い。年齢別では、二十九歳以下が63%と最も高く、次いで四十代が63%と高い割合であった。

「壁掛け型」は、男性が28.8%、女性22.3%、年齢別では五十代以上が28.3%とポイントが高かった。

「どちらでも可能」は、男性14.4%、女性13.4%。三十代が20.9%と最も高かった。

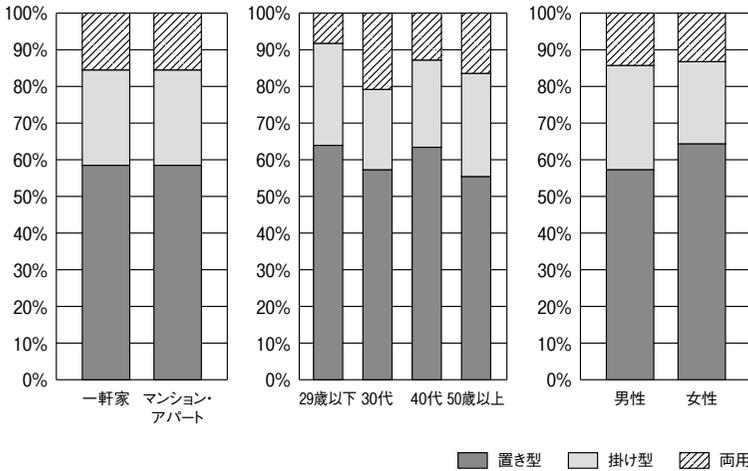
一軒家在住の方は「置き型」58.0%、「壁掛け型」26.5%、「どちらでも可能」15.4%であった。一方、集合住宅在住の方は「置き型」62.7%、「壁掛け型」25.5%、「どちらでも可能」11.8%であった。

一、集計作業について

集計作業は、応募者の住まいの状況・作品形状や祀り方等を、応募者のコメントを考慮しながら集計した(有効集計数二百七十五点)。記載がない項目は、その項目のみ除外したため100%にならない項目がある。形状でどうしても分類出来ないものについては「その他」に分類した。今回は、男女別、年齢別、住まい別において求める神棚の形状や祀り方を分析した。

二、応募者の割合

応募者の割合は、男性53.5%、女性46.7%。年齢別では、二十九歳以下29.8%、三十代24.4%、

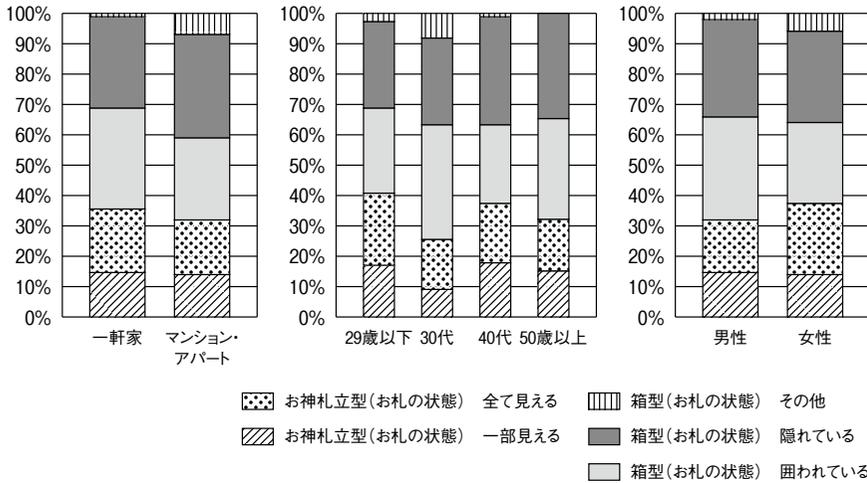


●形状

形状は大きく「箱型」「神札立て型」「その他」の三つに分類した。

「箱型」は、神札が「箱に入っている」形状のものとし、全体では62.4%。男女別では男性66.4%、女性56.3%と10ポイントほど男性の割合が高かった。年齢別では、二十九歳以下56.1%、三十代65.7%、四十代60.9%、五十歳以上68.6%であった。

「神札立て型」は、神札を「立てかける」形状で、神札全体が見えている、あるいは露出している形状のものを分類した。全体では



3.9%、男性31.5%、女性37.5%で、女性の方がポイントほど高かった。年齢別にみると二十九歳以下40.2%、三十代25.4%、四十代37.0%、五十歳以上31.7%であった。どちらにも属さない形状「その他」は、全体の3.6%であった。

また、「常に神札が見える」は年齢が高くなるほど割合も高くなるが（二十九歳以下52.5%・三十代52.3%・四十代54.4%・五十歳以上55.0%）、逆に「常に神札が見えない」は年齢が低くなるほど割合が高くなる（二十九歳以下15.8%・三十代10.4%・四十代8.7%・五十歳以上6.7%）。

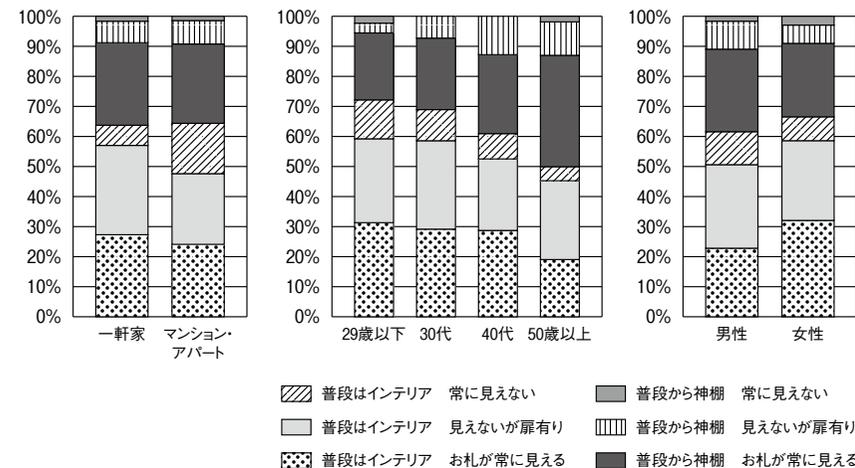
一軒家在住は「常に神札が見える」が54.6%、集合住宅在住が50.0%。「常に神札が見えない」は一軒家在住が7.9%、集合住宅在住が18.2%であった。

●存在感
インテリアに溶けこむものや見た目だけでは神だなど分からないものを「普段はインテリア」、従来の神だなどを模したもののや、一見して神だなど分かるものは「普段から神だなど」として分類した。

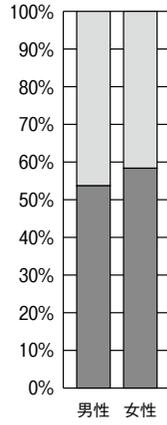
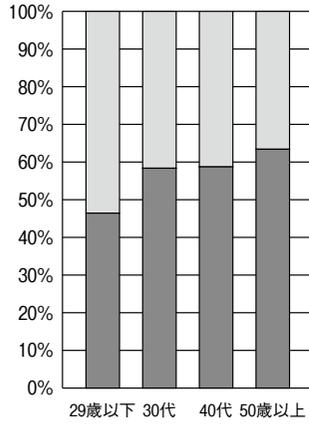
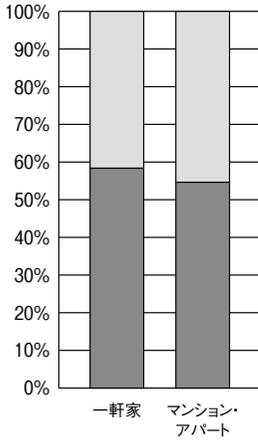
また、「神札が常に見えるもの」「普段は神札が見えないが扉が付いたもの(扉付き)」「常に神札が見えないもの(扉なし)」についても分類した。

「普段はインテリア」は全体63.9%、男性62.3%、女性67.0%、年齢別では、二十九歳以下は72.0%と最も高く、その後年齢を追う毎に割合が下がり、三十代68.7%、四十代60.9%、五十歳以上では50.0%となった。

神札の状況については「神札が常に見える」が全体の53.7%、「普段は見えないが扉付き」が全体の35.1%、「常に神札が見えない」が全体の11.3%であった。



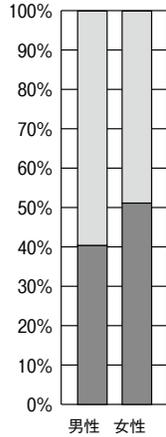
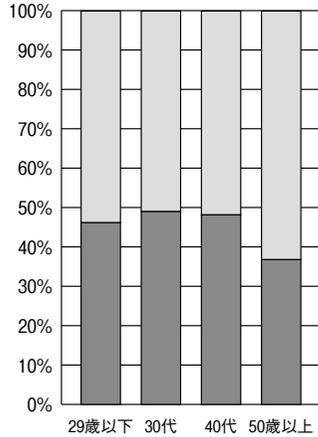
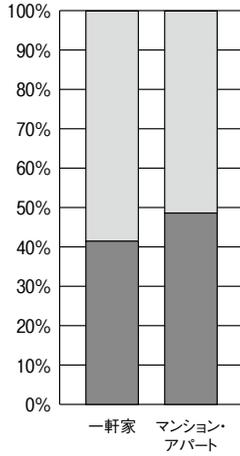
では、「普段はインテリア」の中の神札の状況に着目すると、「常に神札が見える」は全体で26.3%、男性26%、女性32.1%。年齢別では、最も高いのが二十九歳以下で30.5%、最も低いのは五十歳以上で18.3%であった。「普段は見えないが扉あり」は全体27.4%、男性28.1%、女性26.8%。年齢別では、三十代の



●素材
素材については、「木製」のデザインは全体の56.6%。女性では58.0%と高い数値を示した。年齢別では、五十歳以上が63.3%と最も高く、二十九歳以下が46.3%と最も低かった。

29.9%が最も高く、四十代の23.9%が最も低い。また、一軒家在住が30.1%と高い割合を示している。

10ポイントの開きがあり、また、五十歳以上が最もお供え物が出来るデザインが少なかつ



●お供えの場所
「有る」が全体48.4%、男性40.1%、女性50.9%。年齢別では、二十九歳以下45.6%、三十代48.4%、四十代47.8%、五十歳以上36.7%となり、男女で

お供え物が出来る場所の有無はデザイン画に描かれているか、コメントに記載があるもので判断した。

た。また、住まい別でのお供え物の有無について、「有る」は、一軒家在住が41.3%、集合住宅在住が48.1%であった。

四、まとめ
今回の応募作品は、六割の方が棚などの上におまつり出来る「置き型」のデザインを描いた。しかし、これは従来の神棚のように天井近くに棚を付けておまつりするような大掛かりな祀り方ではない。それは、集合住宅在住が一軒家在住よりも「置き型」形状の割合が高いこと、二十九歳以下で「神札立て型(置き型形状に分類)」形状の割合が高いことから、多くの方は限られた空間の中でお祀りできる神棚の形状を求めている事が伺える。

住宅がより洗練されたデザインに変わっていく中で、若い世代ほど神棚にデザイン性を求める傾向は数字の中に現れている。しかしインテリア性を重視するデザインでありながら、一見して神棚と分かる「神札が常に見える形状」の割合がどの年代も五割を超えていた。一方で、「神棚」である事を隠したいと思う割合も四割に近く、年齢が低いほど割合が高い傾向がある。中には、大切なものゆえに普段は扉を閉じて隠したいという人も含まれるが、多くは「他の人への配慮」として「隠す」必要を感じているのがデザイナーのコメント等からも伺える。

お供え物が出来る形状が五十歳以上で36.7%

と二十九歳以上より9ポイントも少なかったのは注目すべき点であろう。自ら神棚奉斎を実践してきた、あるいは実践する親の姿を見てきた年齢層で「壁掛け型」のデザインが多かった点から推測すると、お供え物や掃除等「日々のお世話」を負担と感じている事の表れと言えないだろうか。天井近くの神棚に脚立を使用してお供えものをする事は危険であり、またそのような声を実際に聞く事は少ない。高齢化が進んでおり、奉祀場所や方法について柔軟な対応が求められている。

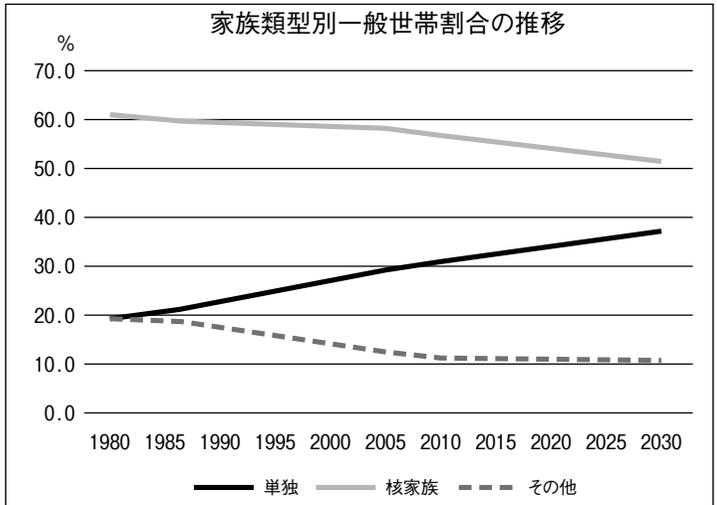
今回の集計結果から求められる神棚は「限られた空間の中でお祀りできる」、「お供え物等日々のお世話が行いやすい」という二点を併せ持った神棚と言えるのではないだろうか。

五、終わりに

平成二十三年度の神宮大麻の頒布数は約八百八十万体で、昭和十八年に最大一千二百万体頒布されて以来減少し、近年はおよそ九百万体で推移している。一方、平成二十二年度の国勢調査によると、日本の総世帯数は五千八百八十四万世帯。一千八百六十万世帯だった昭和三十三年から比べると、約五十年で2.8倍となった。

平成二十二年時点で世帯数が最も多いのは、単身世帯の一千六百七十八万世帯で、全体の34%である。六十五歳以上の高齢者では、男性十人に一人。女性五人に一人が一人

家族類型別一般世帯割合の推移



立っている神社にも当然ながら大きな影響があると考えられる。

一方、神棚奉斎は地域の人々と神社をつなぐ接点の一つであり、今後増加する単身世帯に神棚奉斎を勧めていくことは神社運営においても大変重要な意味を持つのではないだろうか。

今回の集計結果と、「単身世帯の増加」という社会情勢を考慮し、より奉斎しやすい神棚の形状を求め二回目の神棚デザインコンテストの募集を始めた。

「やさしい神棚」デザインコンテストと題し、限られた住居スペースでも奉斎でき、「人にやさしい」「環境にやさしい」「お年寄りにやさしい」など、色々な「やさしさ」を持った神棚デザインを募集している。募集期間は七月十五日から九月十五日。若い世代にも神棚奉斎について考える機会となるよう、そしてまた、近い将来それぞれの仕事に就いたとき、このコンテスト参加の経験が活かされることを願って建築学や住居学の学科を持つ大学や専門学校などにもポスター・チラシを送った。

神棚奉斎・大麻増頒布に向けて行っている本事業にご賛同頂き、コンテストのポスターの掲示、いのりシリーズ取扱い神社への登録等、ぜひご協力をお願いしたい。

暮らしをしている。単身世帯の割合は、今後徐々に増え、平成四十二年(二〇三〇)には、34%とほぼ四割の世帯が単身世帯となり、五十代六十代男性では、実に四人に一人が単身者になると推計されている。(国立社会保障・人口問題研究所編(二〇〇八)『日本の世帯数の将来推計(全国推計)』二〇〇八年三月推計)。

単身世帯は、地域社会との交流が薄い傾向がある事が分かっており、単身世帯の増加は地域社会、特に氏子組織を基盤として成り

「神主さんと伊勢神宮へ行こう」報告

恩田 宏典

教化事業部では、平成二十二年度より県内の神社と神道に関する体験をして頂くことで「神社ファン」を増やそうと、バスツアー「神主さんと神社へ行こう」を企画実施してきました。

そこで、これまでのツアー参加者に、「行ってみたい神社」についてアンケートを試みたところ、最も希望の多かった神社が「神宮」でした。こうした要望に応えようということから、初の県外での企画として、新緑の香る五月二十六・二十七日の一泊二日で、「神主さんと伊勢神宮へ行こう」を開催しました。

ツアーの告知は、昨年十二月より、前回参加者と神社庁ホームページをはじめ、パンフレットを県内神社、およびJTB店頭で配布しました。当初は、募集の締め切りを四月下旬と考えていたところ、なんと二月初旬には、応募多数で定員に達してしまいました。

最終的に、当日の参加者は五十八名となり、教化事業部員二名、神道青年会より助勢二名、神社庁職員二名が同行しました。

なお、今ツアーは外宮・内宮両宮の「御垣内特別参拝」を行うため、事前に服装に対する注意、参拝前の飲酒禁止の案内をしました。名古屋までの新幹線車内では、参加者には、車内用に準備した「伊勢あんちょこ」という神宮や遷宮に関する簡易な資料をお渡しし、翌日ここから二十問のクイズを出題し、上位の方に賞品を差し上げることが告げたので、

じっくり目を通しておられました。また、今回のツアーでは名古屋からの参加者と駅構内で合流し、二台のバスに分乗して一路伊勢に向かいました。

名古屋から伊勢に向かうバスの車中では、スタッフの紹介、行程説明の後、「神宮」のDVDを鑑賞していただきました。昼食は、内宮前の「勢乃國屋」で、名物の伊勢うどんと手こね寿司を味わって頂きました。

昼食後、外宮参拝となり、表参道「火除橋」前から二名の神宮職員のご案内で、「清盛楠」「手水舎」「第一鳥居」「齋館」「神楽殿」「五丈殿・九丈殿」など、普段気に掛けずに通り過ぎていた建物まで詳しい説明を受けました。

御正宮の御垣内特別参拝では、皆さん緊張の面持ちで参拝に望まれ、参拝後には、参拝できて良かったと感激されていました。

御垣内参拝後も、「御正殿」「別宮遥拝所」「多賀宮」「風宮」「土宮」等、神事の様子などを交えながら、詳しい説明を受



けました。

最後に、四月七日に開館したばかりの「せんぐう館」を見学しました。式年遷宮の意義と祭儀や神宮の年中行事の概要の展示品。社殿造営、御装束神宝の製作工程などを学芸員の説明を受けながら見学でき、伝統の尊さとして、それを伝えることの大切さを感じていただけようでした。

参拝後、宿泊先の外宮に程近い「伊勢パールピアホテル」に向かいました。夕食時は、

各テーブルにスタッフも分かれて食事を共にし、参拝したばかりの外宮のことや、神社や神職についての質問などを受けながら、懇親を深めました。

二日目は、朝八時半ホテルを出発。参加者の中には、早朝の内に、外宮や月夜見宮、さらには二見興玉神社まで足を伸ばされて参拝された方もいたようです。

内宮に到着すると、昨日外宮をご案内いただいた二名の神宮職員の方が出迎えられ、初日同様「宇治橋」「神苑」「斎館」「五十鈴川御手洗場」「滝祭神」「風日折宮」などを順に詳しく説明を受けました。

「神楽殿」では、昇殿して別大々神楽を奉奏したために舞楽の「蘭陵王」までも拝見することができました。

御神楽奉奏後は、「五丈殿」「御贄調舎」で、三節祭の神事の様子など説明を受けました。

内宮御正宮では外宮同様に御垣内特別参拝をいたしました。隣接する新御敷地の建造中の新殿は、白い簀屋根で覆われ、見ることは



出来ませんが、遷宮後にも是非参拝したいと皆さんが話されていました。

その後、「初種石」「御稻倉」「忌火屋敷」「荒祭宮」と詳しい説明をして頂きました。

神札授与所前で、一旦解散とし、御神札・御守りを受ける方、境内散策や猿田彦神社まで行かれたり、おかげ横丁などで昼食やおみやげの買い物などバスの出発まで自由時間を過ごされました。

午後一時半に内宮を出発しましたが、名古屋までのバス車中では、お待ちかねの「神宮・遷宮」に関するクイズを行いました。さすが熱心な方ばかりで、事前にお渡しした資料の内容はもちろん、二日間、神宮職員に受けた説明も頭に入り、正解者が多くて賞品を差し上げる上位者を決めるのに苦労する程でした。神宮を深く知りたい、感じたいという参加者の強い気持ちを感じられました。

その後もスタッフへの神社・神職・神道への質問などで時間は過ぎていきました。名古屋からは新幹線で、東京駅に午後六時十分

に到着し、解散となりました。

参加者に、

今回のツアーの感想や要望などアンケートの協力をお願いしました

ところ、「神宮に観光で出向くだけではなく、そこで奉仕されている神職の生の声や説明をして頂き、見聞を広めるのに今回のツアーは参加して良かった。」

「日頃、神主さんとの接点、交流がないので色々な話が聞けて良かった」等の意見を頂きました。

教化事業部では、今後も今回の様な県外のツアーも企画していきたいと考えております。

(教化事業部班長)

